

建

築とデザインの教育研究で伝統を持つ京都工芸繊維大学では、昨年度から文部科学省の国立大学機能強化事業のもとで、社会的課題の発見と解決に取り組む、建築学とデザイン学を中心とした学内組織「KYOTO Design Lab」(D-Lab)を立ち上げた。ここでは、「デザイン」と建築に関わり優れた実績を誇る世界の大学・研究機関と連携し、京都で新たな教育研究環境を作り上げることを目指している。建築の分野では、これまでスイス連邦工科大学、ハーバード大学、デルフト工科大学、パリ・ソルボンヌ大学などの連携事業を実施したが、それは単に研究者を招聘したり学生のワークショップを共同開催したりするのではなく、一定期間研究室ごと来てもらい共同で教育研究にあたるというものである(それをユニット誘致と名付けた)。

まだ二年半の経験であるが、その中で最も印象に残ったのが、最先端を担っていると思われるこうした大学の研究者たちが、建築をきわめて柔軟に捉えていることである。

スイス連邦工科大学スタジオバーゼルのグループと共同で行った調査は、「食」である。「食」の新陳代謝から京都という都市を新たに捉えることを目指した。観光客でごった返す錦市場も調査した。建築は単体で捉えるのではなく、エネルギー・水・食品・土壌・廃棄物などの循環の中で位置づけなくてはならないというわけだ。また、同じスイス連邦工科大学のチューリッ

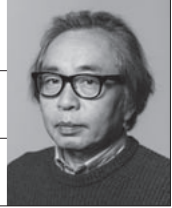
各 人 各 説

建築を多様な視点から 改めて捉える

京都工芸繊維大学 デザイン・建築学系 教授

中川 理

Osamu Nakagawa



と校ランドスケープ研究室と京町家や日本庭園の調査を実施したが、ここでは3Dスキャンによる形態の実測だけでなく、「音」も重要な要素として捉え、家や庭の音を採取(録音)し、それらから建物と庭と都市の相互の関係を分析しようとした。

設計し建設するだけが建築の行為ではないことも改めて認識させられた。建築におけるAR(拡張現実)の可能性を追求しているマサチューセッツ工科大学の長倉威彦氏のグループは、京都や滋賀の文化財寺院を、全方位カメラで撮影し建築(特に内観)を好きな視点から見ることが出来る三六〇度動画で捉える試みが続いている。その動画において自由な方向から認識できる体験は、現実の建築が、あたかも仮想現実になってしまったかのようである。そこには、既存の建築物の見え方を拡張することで、建築が持ち得る意味を大きく変えていく可能性を見いだすことができる。

とにかく、建築の捉え方が多様にあることを日々実感させられている。もちろん、「食」や「音」やARなどは、建築学の分野から遠いものであり、われわれがあまり馴染みのない広範囲な学問領域でのアプローチが必要となる。そのため、D-Labにおける取組みは、多くのエネルギーと時間が費やされることになる。しかし、これからの建築を考える際に、こうしたアプローチこそ必要となるはずであろう。